

事業概要書

事業名	ボッチャを使った復興支援&障がい者連携				
開始日	2017年1月1日	終了日	2017年12月31日	日数	365日
団体名	Arts and Sports for Everyone				
(カウンターパート)	日本ボッチャ協会、スペシャルオリンピックス日本・熊本、オハイエくまもと、なないろネットワーク、熊本こども・女性支援ネット				
担当者名 (事務局)	会長 吉田 祐一	スタッフ人数	10人		

事業費総額 (税込)	2,258,540円
CF 事業枠	1,450,000円
その他資金	808,540円

事業目的	年齢や障がいにかかわらず誰もが参加できるユニバーサルスポーツ「ボッチャ」を通じて、仮設住宅住民の交流促進と孤立化防止を実現する。そして、障がい者支援団体の連携促進を含め、誰もが生きやすい共生社会を目指す。
事業全体の概要	<p>● <u>Arts and Sports for Everyone とは</u></p> <p>2020年の東京パラリンピック開催に向けて、障がい者スポーツへの追い風が吹き始める中、2016年4月、知的障がい者の社会支援を行う「スペシャルオリンピックス日本・熊本」の活動に関わっていたメンバーらが設立。障がい者スポーツに限らず、障がい者芸術団体を含む日本国内すべての団体間の連携を深めるため、①情報共有事業（各団体の情報を収集し、他団体および市民に知らせる）②イベント開催事業（障がい者の活動を広く知ってもらうためにイベントを主催あるいは共催する）③連絡会事業（各団体の連携を深めるために連絡会を開催する）④人材育成事業（各団体が主催するイベントにボランティアとして参加およびボランティア参加者を募る）の4事業を展開する団体として設立した。しかし、直後に震災が起きたため、復興支援につながる活動を行ってきた。具体的には以下の通り。</p> <p>①物資支援：避難所をめぐり、必要と言われた物資を佐賀の支援者から集め配送（宇土小学校、走潟小学校、白山小学校、白川小学校）。</p> <p>②寄付：佐賀の陶器会社より無料提供された食器類で陶器市を開催（2回）し、1点10円で配布。収益金を熊本の障がい者芸術・スポーツ団体に寄付。支援先はスペシャルオリンピックス日本・熊本、おはいえ熊本、アールブリュットパートナーズ熊本、ソレッソサッカークラブ知的障がい者チームの4団体。</p> <p>③イベント実施：</p> <p>-益城町、嘉島町、熊本市の10ヵ所以上の避難所をまわり、ミニコンサート、抹茶提供、ボッチャ体験会、紙芝居などを実施。</p> <p>-熊本市繁華街の上通りやイオンモール熊本（24時間テレビの企画、200名以上集客）で</p>

もボッチャ体験会を実施。

熊本大学にて「障がい者スポーツの力で熊本を元気に」というテーマで、ブラインドサッカー&ロービジョンフットサル講演会・体験会を開催。参加者約 150 人。

④復興支援ポスターの作成・販売：1000 枚作成し、各所に配布・掲示をすることで、熊本を応援。復興 T シャツも作製して販売。

⑤ボッチャの無料貸し出し：7つの仮設団地と3つの特別支援学校、および2つの地域施設に計 12 セットのボッチャを無料で貸し出し、主体的な活動の支援を行っている。

●事業実施の背景

東日本大震災では、仮設住宅に移り住んだ後、周りとの接触がなくなり、5年間で200人近くが孤独死したという数字がある。その教訓から、熊本県内の仮設団地には集会所や談話室が作られ、すべての仮設住宅には縁側が作られている。ただ、避難されている方々が主体的に活動する機会がなくては、住民間の交流は生まれにくい。そこで、その道具としてユニバーサルスポーツである「ボッチャ」を貸し出し、必要な時に集まって楽しみ、ストレスを発散し、交流を深める一助にしたいと活動をしてきた。

同時に、障がい者スポーツに慣れ親しむ機会として、障がいのある人とない人との交流が自然にできるのではないかと考え、地震後1年前後を目安に、交流できる大会を設定し、本団体の目指す“共生社会”実現への足掛かりとしたい。

また、今回の地震で、障がい者をはじめとする弱者が避難所でつらい立場に置かれる事例が多かった。例えばじっとするのが苦手で、飛び跳ねて奇声を発することの多い自閉症の子どもの親は、避難所に行くことをあきらめて、危険を承知で自宅に留まったり、避難所に行っても炊き出しの列に並べず、事情を話しても並ばないとだめだと言われて困ってしまい、避難所を出ていった家庭も多くあった。福祉避難所もあったが、認知度は低くて数も少なく、親戚や知り合いに世話になる避難者が多かった。このような課題に障がい者やその家族だけで対処するのは困難なため、障がい者支援団体がサポートすべきだったが、障がい者団体間の連携不足が原因で、何も動きを取れなかった。そこで、まずは障がい者スポーツ団体同士の連携を深める契機となるようなフォーラムの開催が求められている。

●ボッチャとは

ボッチャは、ヨーロッパで生まれた重度脳性麻痺者もしくは同程度の四肢重度機能障がい者のために考案されたスポーツで、パラリンピックの正式種目。ジャックボール（目標球）と呼ばれる白いボールに、赤・青のそれぞれ6球ずつのボールを投げたり、転がしたり、他のボールに当てたりして、いかに近づけるかを競う（日本ボッチャ協会より）。

●なぜボッチャか

障がいによってボールを直接投げることができなくても、ランプスと呼ばれる補助器具などを使って競技参加が可能であり、またあまり転がらないボールを使うため、仮設住宅の集会所のような狭い部屋など場所を問わずに、誰もが参加できるため。個人やペア、3人

1組など少人数から始められる点も利点の一つ。

● **取り組むべき課題**

障がい者の理解が進んでいない背景には、障がいのある人とない人が接する機会の欠如がある。今回の震災では、障がい者とその家族が避難所にとどまりにくい事例が発生するなど、障がい者への理解不足と障がい者団体同士の連携の弱さが露呈された。連携がとれていれば、連名で自治体に陳情したり、福祉避難所などの情報をもっと共有できた可能性がある。また、今後このような事態が他地区で起きたときに、同じようなことが起きないように、情報提供できるものと考えられる。

障がい者に関わる問題とは別に、避難者のストレス、特に高齢者の運動不足の問題がある。周りの人たちと接触の多かった避難所から、周りとの接触が少なくなる仮設住宅への移行が進み、プライバシーは確保される反面、身寄りのない高齢者などの孤立化が懸念される。また、ボランティアによる企画が減っていく中、外部の支援に頼らず、自分たちの力でコミュニティを維持するためにも避難者が自主的に活動することが必要である。

この2つの問題をボッチャというスポーツが解決してくれる可能性がある。そして、スポーツを軸に、障がい者同士がより強くつながり、共生社会の実現に近づくと考えられる。

● **Civic Force の「パートナー協働事業」他**

① 「ボッチャ」を通じた仮設住宅住民の孤立化防止支援

これまで購入したボッチャは15セットで、そのうち12セットは貸し出し済みである(これまでの貸し出し先は以下の通り)。

ボッチャ貸出先一覧(2016年12月現在)

通し番号	区分	市町村名	名称	戸数
1	仮設団地	益城町	飯野	48
2		益城町	テクノ	516
3		益城町	津森	75
4		益城町	広崎	53
5		大津町	室南出口	76
6		阿蘇市	三久保	26
7		熊本市	塚原	96
8	特別支援学校	熊本市	聾学校	N/A
9		熊本市	熊大附属	N/A
10		荒尾市	荒尾支援学校	N/A
11	その他	熊本市	富合自治会	N/A
12		南阿蘇村	ふれあいセンター	N/A

さらに18セットを購入予定で、御船町、嘉島町、甲佐町、南阿蘇村はじめ熊本県内で仮設住宅が設置されている自治体には最低1ヵ所には貸し出す予定。また、特別支援学校も、肢体不自由児協会からボッチャセットが寄付される学校以外には貸し出したい。地震直後

に訪問した避難所が設置された学校の支援学級にも貸し出したいと考えている。

現在貸し出している仮設は市町村役場の担当部署を訪問し、自治組織ができていると紹介されたところに加え、メンバーのネットワークを通じて依頼を受けた仮設、飛び込みで訪問し、そのまま貸し出した仮設など様々。これからの設置個所については、役場からの自治組織に関する情報をもとに決めて行く予定である。なお、現在、ボッチャの在庫がなくパキスタンからの商品が届くのを待っている状態。一方、仮設団地では自治組織が出来上がっていないため、その進展を待ってから貸し出すところもある。貸出先には各場所や人にあったボッチャの活用方法をレクチャーし、定期的（最低でも2カ月に1回程度）に訪問。しっかり活用してもらえるよう、ボッチャは「寄贈」ではなくあくまで「貸与」とし、主体的な活動を促すとともに、貸し出しがほぼ完了したころ（2017年2月予定）に、改めて講習会を開催する。

② 仮設住宅住民と特別支援学校との交流事業

2017年4月に震災から1年が経過するため、それまでの活動のまとめと、それ以降の活動の方向性を示す活動としてボッチャ大会を開催し、障がいのある人（特別支援学校の生徒）とない人（仮設住宅住民）がボッチャを通して自然な形で交流し、互いの理解を深める。その大会参加者を歓迎する障がい者による音楽演奏や絵画展示なども行い、参加者に障がい者の活動を知ってもらう。

③ 熊本地震からの復興と障がい者スポーツフォーラムの開催

熊本には様々な障がい者スポーツ団体があるが、その団体が一堂に会し、今回の震災での課題を含め問題を共有してお互いの活動を知る。そして、競技を体験する機会をすることで、団体間の繋がりを深め、2020に向けて同じベクトルで活動することで、共生社会の実現を加速させる。障がい者スポーツの第一人者による基調講演、熊本の団体の代表者によるパネルディスカッション、それを受けてのスポーツ体験会が主な内容となる。（2017年11月に実施予定）

● 期待される効果

- ① 孤立化を防ぐとともに、仮設団地の自治活動を促すことができる。また、知らないうちに障がい者スポーツに親しむことができ、障がい者と自然と触れ合う準備ができる。
- ② ①を踏まえて、実際に障がいのある人とない人が交流することでお互いの理解を深める。ユニファイド（障がいのある人とない人で同じチームで競技する）形式で行うことで、互いに協力することで、互いの良さを認め合い、共生社会の実現への足掛かりになる。
- ③ 障がい者団体同士がつながることで、今後問題が生じたときに協力して対処することができる。また、2020年に向けて、障がい者が協力して活動する様子を社会に発信することで、社会に復興に向けての元気・エネルギーを発することができる。

事業内容(事業種別 (コンポーネント) ごと)	裨益者 (誰が、何人)
<p>1. 「ボッチャ」を通じた仮設住宅住民の孤立化防止支援：</p> <p>これまでボッチャを貸し出した仮設団地を最低2カ月に1回は訪問する。また、ボッチャを入手次第、まだ貸し出しできていない約10カ所の仮設に対し、貸し出し、それが終わり次第、日本ボッチャ協会から講師を招いて講習会を実施する。</p> <p>②に向けて、8カ所程度の特別支援学校や学級にも貸し出す予定。</p>	<p>仮設に住んでいる子供たちおよび高齢者。仮設団地ごとに1回につき10人程度の参加が見込まれる。</p>
<p>2. 仮設住宅住民と特別支援学校との交流事業：</p> <p>仮設住宅住民と特別支援学校の生徒と一緒にボッチャを楽しむ大会を、5月から6月に益城町の小学校の体育館で実施する。最大の目的は、ボッチャという共通に取り組んできたスポーツを通して、相互の理解を深めること。同時に、その大会に関わる人すべてに障がい者およびその活動を知ってもらうことを目的とする。障がいのある人（特別支援学校の生徒）と障がいのない人（仮設住宅住民）が同じチームのメンバーとして競技し、互いに助けあい、協力しながらボッチャというユニバーサルスポーツを楽しむ。開会式では、障がい者による音楽の演奏を行い、参加者を歓迎するとともに、会場の壁面などに障がい者の絵画を飾る予定。</p>	<p>仮設住宅住民は主に高齢者の方々、特別支援学校の生徒は主に高等部の生徒を想定。10団地、10校よりそれぞれ8人程度、計160人程度の参加人数を見込んでいる。</p>
<p>3. 障がい者復興スポーツフォーラムの開催：</p> <p>今回の地震で、露呈した弱者への理解不足と障がい者団体間の連携不足の課題を解消するため、障がい者スポーツ団体同士の連携を深める契機となるようなフォーラムを開催する。障がい者スポーツの第一人者を招き、基調講演をしてもらうとともに、パネルディスカッションやスポーツ体験会などを実施する。</p> <p>障がい者団体同士がつながることで、今後問題が生じたときに協力して対処することができる。また、2020年の東京オリンピックに向けて、障がい者が協力して活動する様子を社会に発信することで、社会に復興に向けての元気・エネルギーを発信する。</p>	<p>あらゆる年齢層の障がい者に加えて、行政職員、障がい者スポーツに関わる、あるいは関心のある市民の方々、計500人程度の参加者を見込んでいる。</p>